九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

歴史的事実と小説的虚構のあいだ ： 半井桃水「胡砂吹く風」をめぐって

金, 裕美
九州大学大学院比較社会文化学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1931475

出版情報：九大日文. 30, pp.2-14, 2017-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

歴史的事実と小説的虚構のあいだ

――半井桃水「胡砂吹く風」をめぐって――

金　裕美（KIM Yumi）

はじめに

一八九三（明治二十六）年二月二十二日の『東京朝日新聞』に、「（広告）今古堂出版発売所金桜堂朝鮮小説胡砂吹く風桃水痴史」という広告が載せられている。「胡砂吹く風」が単行本として出版されるという知らせである。「胡砂吹く風」は単行本になる前に『東京朝日新聞』に新聞小説として発表された。連載は、一八九一年十月一日から翌年四月八日まで百五十回にわたる。広告に「朝鮮小説」と打ち出されていることからも明らかだが、小説は朝鮮を舞台としている。主人公の林正元が親の復讐を果たし、朝鮮の様々な問題を解決した後、朝鮮の最高顧問になる物語である。

本稿で考察の対象とする「胡砂吹く風」についての研究は、まだ萌芽期の段階にとどまっている。それは、作家半井桃水が独立した研究対象としてほとんど取り扱われてこなかったことと深く関係がある。これまでの研究において桃水はただ単に一葉研究に付随する要素としてのみ取り扱われてきた。そうしたなかでも、歴史的事件が「胡砂吹く風」の内容を構成する重要な素材となっていることに注目した数少ない先行研究は、主に「胡砂吹く風」の小説的性格について論じている。具体的には、『近代文学研究叢書 第二十五巻』（昭和女子大学、一九六六年九月）において「胡砂吹く風」が伝奇小説として分類されていることから、それに対する反論として、この小説を政治小説として読み解く試みがなされてきた(1)。

その他、「胡砂吹く風」が持つ朝鮮紹介書としての価値についても論じられてきた。そこでは、桃水が「胡砂吹く風」を通して朝鮮文化を紹介していること、紹介された朝鮮文化を一定の基準において整理していること、そして、「胡砂吹く風」における朝鮮の描写が、桃水の朝鮮に対する認識であることが指摘されている(2)。このように、「胡砂吹く風」が朝鮮を素材にしたことについて、従来の研究はジャンル論的、テーマ論的な分析にとどまっているといえる。

そこで本稿では、「胡砂吹く風」の小説的性格に着目するのではなく、登場人物の設定という角度から論じることを試みる。新聞記者として東京朝日新聞に勤めていた桃水が、新聞小説の連載を始めたのは一八八九年のことである。初めての小説「唖聾子（おしつんぼ）」の連載を始めたのが三月十日なので、『東京朝日新聞』が創刊された一八八八年七月十日から約八ヵ月後に、桃水は小説を執筆しはじめたことになる。その後も桃水は、「くさ

れ縁」・「小町奴（こまちやつこ）」・「海王丸（かいおうまる）」など、続けて数多くの新聞小説を執筆していく。その作品数は一八八九年から一八九一年の間だけでも十四作品に及ぶ。当時の新聞小説が新聞の販売部数を伸ばすための一種の目玉商品であったことを踏まえると、桃水の小説は同時代の読者にある程度人気を得た小説であったと考えるのが妥当であろう。桃水自身も同時代の読者を意識した新聞小説を次々と発表していく。なかでも「胡砂吹く風」は多様な読みが可能な作品である。そのひとつの要因として、登場人物の設定における「同時代」の反映が挙げられる。

前作「下闇」と見比べてまず気づくのは、登場人物の膨大な数である。主人公林正元のほかに、実に多くの人物が登場しては次々と姿を消していく。林正元の物語が小説の中心ではあるものの、同時代の朝鮮を舞台としながらストーリーが展開される。そのため、虚構の人物と歴史上の人物が混在しているのも「胡砂吹く風」の特徴のひとつである。桃水はこの膨大の数の登場人物をどのように設定し、小説を執筆したのであろうか。

従来の先行研究では「胡砂吹く風」の登場人物の設定について、本格的な研究はなされていない。筆者は以前、「半井桃水「胡砂吹く風」論――『朝鮮記聞』『鶏林医事』との比較を中心に――」（『九大日文』第二十八号、二〇一六年十月）と題する論考において、「胡砂吹く風」と『朝鮮記聞』および『鶏林医事』の比較について論じた。そこでは、「胡砂吹く風」が朝鮮に関して描写する際に、『朝鮮記聞』や『鶏林医事』を参考にした部分が確認できた。そうした点を踏まえつつ、本稿では桃水がどのように「同時代」を反映させたのかについて登場人物の設定という視点から論じることで、小説内に描かれた明治期の朝鮮に同時代を生きた桃水の時代認識がどのように反映されているのか明らかにする。

一、主人公林正元について

桃水は東京朝日新聞の専属小説家として数多くの新聞小説を書いたが、「胡砂吹く風」は異色なものとして桃水研究のなかでも比較的取り上げられることが多い作品である[3]。その特異性は次の二点に整理できる。具体的には、朝鮮を背景に林正元という混血児を主人公に仕立てあげた点、そして「付（附）記す」の形で、小説内で描写された朝鮮の慣習や地理などを説明している点である[4]。確かに、「胡砂吹く風」における主人公の設定は、以前桃水が『東京朝日新聞』へ連載した新聞小説群と比べてみると比較的目立つ設定といえる。林正元は日本人の父と朝鮮人の母を持つ混血児として設定されている。水野達朗は「半井桃水『胡砂吹く風』」において、主人公林正元の混血児という設定が持つ意味について次のように述べている。

> 林正元は日本人と朝鮮人との間で生まれた混血児として設定されており、彼のもつこの〈中間性〉は小説のなかで大きな役割を果たしている。しかしその役割とは、「日本人」でも「朝鮮人」でもない、境界線の曖昧な中間領域を生き

ることではなく、境界線によって明確に区別された二つの領域を自在に往復することである。すなわち、「日本人」としても「朝鮮人」としても振る舞うことができるということになる[5]。

ここで水野は、日本人と朝鮮人の間に生まれた混血児である林正元は、「中間性」を持つ存在であると指摘している。また、草薙聡志は「半井桃水 小説記者の時代（七） ヒーローは朝鮮を目指す」（『朝日総研リポートＡＩＲ21』二〇〇五年十月号）において、主人公林正元が西郷の征韓論を支持している点、日本は朝鮮に対する野心などないと語っている点などを踏まえ、日本の立場を代弁した存在として取り扱われるべきだと指摘している。

確かに、林正元の混血児という設定は「胡砂吹く風」において重要な役割を果たしている。權美敬は「明治文学に描かれた朝鮮――明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」（「金沢大学大学院社会環境科学研究科 博士論文要旨」二〇〇二年六月）において、主人公が混血児という設定は、小説のなかで朝鮮理解と朝鮮紹介というプラスの役割ばかりを担っていたのではなく、スパイとしてのマイナスの役割も担っていたことを指摘している。

しかし、従来の研究で指摘されたこと以外にも、混血児という設定は「胡砂吹く風」のなかで舞台装置としてうまく活用されている。たとえば、林正元が日本と朝鮮内を自由に移動できることは、混血児という設定だからこそ可能なことである。

（正）実はそつと館を脱けて朝鮮内地に旅行をします」主人ハいよ〳〵仰天して（主）マア貴君飛んでもない事を、そんな馬鹿げた真似ハお慶なされませ、捉まると殺されて仕舞ひますぜ」正元更に怖るゝ色なく（正）夫れも承知、併し捉まらぬ様にして行きます、必らず気遣つてハ下さるな（主）何して〳〵そんな旨い事が出来ますものか、尤も貴君ハ言葉が旨くて朝鮮人やら日本人やら分らぬとハ云ふものゝ、ツイ先年も日本人で大層言葉の上手な人が一切韓人の扮打で内地旅行をしました時も何か品物を道に落し拾取つて袂の中へ入れうとハせず日頃懐に物を入れる癖がついて居た所から突然懐へ入れかけて化の皮が顕はれ半殺しになつたとのこと言葉だけ旨くてもなか〳〵内地ハ通れません、マア〳〵お止なされませ、第一親御に私から申訳がありません」[6]

朝鮮時代において、日本人は朝鮮内を自由に移動することは固く禁じられていた。正元と主人の会話には、日本人が身分を隠して朝鮮を旅行している途中、その正体が暴かれて大変なことになったという描写が見られる。本来であれば、日本人としての林正元は、朝鮮の限られた場所に滞在しなければならない。にもかかわらず、林正元が日本と朝鮮内を自由に移動できるのは混血児という設定だからである。実際、林正元は混血児という身分を利用して、朝鮮人として朝鮮内を自由に移動している。

正元ハ翌日より頻りに旅装を整へて日本郵便船の帰航を待ち当国を発して日本東京に至りしハ其年の秋の初にて或る時ハ林正元として同郷出身の貴顕を訪ひ又或時ハ外務省に出入し内より外よりさま〴〵に謀りしかバ(7)

このように、朝鮮と日本の条約を結ぶために朝鮮を離れて日本で様々な人物と会う時には、日本人あるいは朝鮮人に自由自在にその身分を変えている。そして、混血児としての林正元のアイデンティティを読み取れるのが、彼の名前である。

一人の老人（中略）正元が傍に来り（老）少年ハ何処の人かね」突然として問掛られ正元はつと思ひしが左あらぬ体にて老人を拝し（正）私ハ釜山の者です（老）左様か、姓ハ（正）エ、姓ハ林、はやしといふ林の字です（老）林家、左様か、名ハ（中略）（正）名ハ正元（後略）(8)

林正元という名前は、日本でも朝鮮でも通用可能な名前である。朝鮮でも「林」という名字は実在し、「正元」と漢字は異なるが、発音的には「正元」と同音の名前も実在している。

ところで、日本人と朝鮮人の間に生まれた混血児という設定を、桃水はどのようにして思いついたのであろうか。林正元の父林正九郎は元薩摩藩の武士であったが、義に因って同藩の武士を斬ってしまったために故郷にいられなくなり、対馬の小島浪之進の元に身を寄せて、彼の従者として朝鮮の釜山倭館に渡る。林正元は、この倭館という空間で生まれた混血児である。田代和生は『新・倭館――鎖国時代の日本人町』において、倭館を次のように説明している。

近世倭館の住民になるには対馬藩の許可を必要とし、禁止された行為は処罰される。日本人は長期・短期をとわず館内への入居を義務づけられ、館外に居住することは許されない。（中略）同伴に家族、とくに妻や娘といった女性を連れて行くことはできない。日本人の居住が許された町でありながら、永住できない理由がそこにある。女性の同伴禁止は、長崎出島のオランダ人や唐人屋敷の中国人も同じである。しかしまだしも、かれらには長崎で日本女性（遊女）と出会えるチャンスがある。（中略）唐人屋敷への遊女の出入りも多く、年間述べ（ママ）人数にして二万人以上に達するというから驚きである。生まれた子供は長崎の役所へ届けられ、父親の本国へ渡ることこそ禁じられていたが、母の遊女ともども屋敷内で養育することが許されている。ところが倭館は、たとえ妓生（きーせん）であっても女性の出入りはできない。（中略）女性と付き合うことはできない。女性の倭館の出入りが発覚すれば、直ちに「交奸」（密通）事件として扱われる。仲介した者は必ず死罪、女性も男性も悪くすれば死罪を含めた厳罰がくだる。朝鮮側が理想とする近世倭館は、完璧なまでの「男の町」である(9)。

日本内の居留地とは異なり、女性の出入りは厳しく禁じられていたが、実際は倭館でも密通は行われていた。「交奸」（密通）は密貿易や喧嘩と同様に、倭館で多発する事件のひとつであった。朝鮮側は交奸に対して厳しい態度で臨んでおり、仲介者および女性は双方ともに死罪とし、日本人の相手にも同様の措置を求めてきた。一七一一年に別名交奸条約といわれる辛卯条約が締結される。その内容は「一、馬島の人（対馬の者）が、倭館を抜け出して女性を強姦すれば、死罪。二、女性を誘引（おびき出すこと）して和奸する者、あるいは強姦未遂の者は、流罪。三、倭館に入館した女性を通報せず交奸する者は、それ以外の罪を適用」である。この条約以後、交奸が摘発されたのはわずか五件だけである。しかし、捕まるのは運の悪い者だけで、大部分の交奸が見逃されていたことは想像に難くない[10]。第十九代の朝鮮国王、粛宗（すくそん）の在位期間の歴史を記録した『粛宗實』（一八二八年）によると、釜山の百姓のなかでは倭人の出産が多かったという。これらの記録を見ても、混血児という設定は不自然ではなく、むしろ歴史的事実を反映しているとさえいえる。

では、桃水はこの倭館における厳しい法慣習を知っていたのであろうか。桃水の出身が対馬であることを考えると、桃水は幼い頃から倭館における厳しい法慣習や密通事件を知っていた可能性が高い。倭館では、対馬を離れるにあたって必ず医者を一人つけていた。半井家は対馬藩主の宗家に仕える典医の家系であり、父の半井湛四郎は、草梁倭館での勤務のために釜山に渡ることがあった。一八七二年に、桃水は倭館で医師として勤務する父のもとに行き、給仕として働くようになる[11]。この時の暮らしについては、桃水が残した資料が限られているため、はっきりとしたことは言えないが、少なくとも林正元が混血児であるという主人公の設定は、釜山の倭館で生活した桃水ならば十分に設定可能である。

一方、小説の主人公が混血児であるという設定を、当時の読者はどのように受け取ったのであろうか。江戸時代であれば、鎖国のために国際結婚は想像しがたいはずである。しかし、一八七三年三月十四日に、明治政府は日本人が外国人と結婚しようとする場合は届け出て許可を得るよう布告した。

一日本人外国人と結婚しようという場合ハ日本政府ノ允許ヲ受クベシ
一外国人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フベシ若シ故ツテ再ビ日本人タルノ分限ニ復センコトヲ願フ者ハ許可ヲ得能フ可シ
一日本人ニ嫁シタル外国ノ女ハ日本ノ国法ニ従ヒ日本人タルノ分限ヲ得ベシ[12]

このようにして、正式に国際結婚を許された第一号は、長州の南貞助という英国に留学したことのある男といわれている。『読売新聞』には、日本人と外国人の結婚に関する記事がしばしば載せられている。たとえば、一八七五年七月二十五日には、神戸在住の中国人が大阪の日本人女性と結婚したという記

事が、十月十日には、日本人の娘が雇われ先の英国人と結婚したという記事が掲載されている。さらに、一八九〇年十月五日には、「外国人と結婚する者の注意」という記事が掲載されている。これらの記事を踏まえて考えると、一八九一年に発表された新聞小説の主人公が混血児という設定は、当時の読者にとって受容可能な設定といえよう。鎖国のため国際結婚が想像しがたいものであった江戸時代に比べて、明治時代は国際結婚が可能になり、実際に国際結婚の例が見られるようになった。そうした状況を踏まえて、桃水は自らの小説に混血児の主人公林正元の登場させたのではなかろうか。

二、悪役鄭思錫について

「新聞の連載ものは、毎日欠かさず読まなければ、その興味はまづ大半失はれると云つていゝ。」と岸田国士が「新聞小説」（『東京朝日新聞』一八四〇年三月十六、十七日）で語っているように、新聞連載小説は、一日一回ずつ連載するというハンディキャップを持っている。そのハンディキャップを乗り越えるためには、読者が毎日連載小説を読みながら、次回への期待を持つように、読者の興味を維持し続けなければならない。明治十年代、数多くの新聞小説を執筆した「魯文派」つまり仮名垣派は、その方法として膨大な数の人物を登場させている。松原真によると、仮名垣派の新聞小説では、大量の人物を捨て駒のように投入し、間断なく次々と事件を発生させることで、読者の興味を維持していたと指摘している[13]。

桃水にとって、連載回数が百五十回にも及ぶ小説を執筆することは初めての挑戦である。「胡砂吹く風」以前の作品群の連載回数は、長くても約六十回にとどまる。そのため、約六ヵ月にわたって連載された「胡砂吹く風」には、その壮大な物語を反映するように様々な人物が次々と登場する。ある時には脇役で、ある時には敵の姿で、正元の前に新たな人物が登場する。新聞記者から新聞小説家へと転職した桃水にとって、読者の興味を維持することは第一の課題であったといえる。林正元が次々と現れる新たな危機に立ち向かう姿を描くことで、桃水はこの課題を乗り越えようとしていたといえよう。

主人公が小説内でより鮮明に輝くための一番簡単な方法は、主人公と対立関係にある悪役を登場させることであろう。なかでも、林正元の生涯において大きな影響を与えた人物は、因縁の強い鄭氏一族といえよう。兄鄭思錫は「胡砂吹く風」前半を、弟鄭思用は小説の後半を担当する悪役である。特に鄭思錫は林正元の母元小燕を死に追い込み、後に林正元の妻になる香蘭を側室に迎えようと陰謀をめぐらせる人物である。

桃水の初期新聞小説では主人公と対立する悪役がしばしば登場する。特に、一八八九年の『東京朝日新聞』に連載された小説には、「胡砂吹く風」の鄭思錫のような悪役が登場する。たとえば、「小町奴」や「海王丸」[14]にも、主人公の復讐相手であり、同時に主人公を危険に追い込む悪役が登場する。

「胡砂吹く風」前半の主な内容は、鄭思錫に対する林正元の

復讐談である。正元は小島（父の親友であり、正元の育ての親）から母の存在を打ち明けられる。母を捜すため、また鄭思錫に復讐するため、正元は釜山の倭館に渡る。ところが、捜していた母はすでに鄭思錫の命令で斬首されたと聞かされ、正元は鄭思錫への復讐の決意を新たにする。その時偶然、正元は梁山の巨商金珠明が賊に襲われようとしていたところを救い、彼の家に身を寄せることになる。復讐の相手、鄭思錫は今も梁山で権勢を振るっている。金珠明には一人娘香蘭がいて、彼女は正元に恋心を抱く。しかし、鄭思錫は香蘭を妾にするため、金珠明を無実の罪に陥れ、拷問にかける。

この部分は、桃水が東京朝日新聞の海外特派員として韓国の釜山に在留していた時期に、『大阪朝日新聞』に連載した「鶏林情話春香伝」（以下「春香伝」）を下敷きにしていると指摘されている[15]。年若い二人が互いに惹かれていく様はまさに「春香伝」を連想させるし、さらにその若く美しい娘を中央から下った官使が権勢にものをいわせて我がものにしようとするところも、「春香伝」ときわめて類似している。

ここで、元小燕（正元の母）が鄭思錫について言及している部分に注目したい。

（女）（前略）妾が父元貞陽ハ久しく梁山郡の大守を勤めて民百姓の帰服も好く天晴れ仁者と申されましたが隣県の令鄭思錫とて去年漢陽から参つた人是非妾を妻にしたいと媒婆をもつて申し入ましたのを父ハ其人の性質を嫌ひすげなう断りました処其恨から今年の春暗行御使の参られた時鄭思錫ハ賄賂を遣つて父が事を悪しさまに言立て夫ればかりか元貞陽ハ反謀の企てする者と訴へとう〳〵父ハ夫が為め漢陽に召れて死刑となり妻子までも同罪と申渡されましたのを父に代つて郡守となつた鄭思錫から命乞ひして母と妾を助けましたも深い思案のあつての事（後略）[16]

ここでは鄭思錫の悪行について語られている。

ところで、一八八一年七月二十七日の『大阪朝日新聞』には「在韓の社友某氏より又々左の通り報道せられたり」と始まる朝鮮関連の記事がある。

慶尚左道水軍節度韓圭稷（正三品）が赴任以来壓制の名四隣に高かりしか客年夏秋の頃米穀貢進の時に際し諸官使か其貢米を預り居ながら日本人に売り拂ひ其金を以て京城近傍に於て賤價に買入れ之を彼貢米と偽り（中略）日本人に売拂ふて利を得るなど不正の間に私利をのみ営み居たりし折柄茲に黄海道の大商李某■日本人の注文を受け数百石の米穀を積載て西生浦に来りしに水營へ此実を以て届けなば没取せらるゝを恐れ偽て全羅道より京城に運輸する貢米なりと云做したるを韓氏聞て例の手術を施し（後略）

献納の米を買い取り、横流しする悪徳役人韓圭稷について書かれているこの記事は、三回にわたって掲載されている。右の

記事に続く二十八日の記事では、李氏が正当な理由なく逮捕されたという内容が、さらに、三十日の記事では、韓に拷問をかけられて死んだ李氏の復讐をするため、李氏の寡婦が韓を誘惑して刺殺したと伝えられている。新聞にはこの記事を書いた記者名は記載されていないが、一八八一年であれば桃水が東京朝日新聞の朝鮮特派員として釜山に滞在した時期と重なるため、おそらく桃水が書いた記事であろう。そのように考えると、韓圭稷という人物が「胡砂吹く風」の鄭思錫のモデルと考えてもよいのではなかろうか。

鄭思錫も小説内で横流しをし、香蘭の父金洙明を無実の罪で逮捕している。さらに、鄭思錫は香蘭が親を助けるために鄭の側室になる予定の夜、林正元により斬り殺されている。こうした類似点からしてみても、桃水が過去の記事を活用しながら登場人物を創作したと考えるのが妥当であろう。

三、桃水が描きだした歴史的事実とその結末

敵対する一派との争いで負傷した春使令を救ったことをきっかけとして、正元は李同仁の親友で名家の李嘉雄を知ることになる。李嘉雄は妓生、香雲をめぐって内官の鄭思用と対立しており、李嘉雄派の春使令は鄭思用の使令たちに襲われていたのである。「胡砂吹く風」の六十九回で言及されて以降、後半の悪役である鄭思用が本格的に登場する。

李嘉雄との酒宴で正元は鄭思用が鄭思錫の弟であることを知る。やがて席に侍った妓生香雲は、驚くことに金珠明の娘香蘭であった。酒宴が終わり、香蘭の家を訪問した正元が帰った後、香蘭は何者かに拉致されてしまう。言うまでもなく、鄭思用の仕業である。監禁されている香蘭を無事脱出させた正元は、この後、朝鮮をめぐる歴史的事件に巻き込まれる。

このように、「胡砂吹く風」は前半が林正元の個人的事件を中心に展開されているのに対して、小説の後半になると実際の歴史的事件が主な内容を占めるようになる。

それでは、「胡砂吹く風」の舞台になる明治期の世界と日本はどのような時代を迎えていたのであろうか。世界的には大きな歴史的変化があり、世界各国が各々の勢力拡大に力を入れていた時期である。少数の西洋列強がアジア、アフリカ地域を強制的に植民地へと編入しようとする帝国主義の時代であった。特に東アジアは従来の中国を中心とした秩序が揺らぎ、近代化された西洋列強が東アジアに進出して、その影響力を拡大しようとした。このような帝国主義の侵略に対応して、東アジア各国は自国の国家的発展段階と危機意識に基づいた様々な近代化への道を歩むことになった。東アジアで最初に近代化を成功させたのは日本であった。ペリー来航に象徴される西洋列強の軍事的圧力に危機を感じた日本は、それまでの鎖国政策を捨てて開国の道を選択せざるを得なかった。近世における封建的要素を取り払おうとする明治維新を迎えた日本は、様々な改革を断行した。

一方で、一八七五年の江華島事件の影響で朝鮮は日本と日朝

修好条規を結び、一八八二年七月二十三日には漢城で「壬午軍変」と名付けられる国兵の反乱が起こった。日本公使館が攻撃されて館員らが死傷し、さらに王妃閔氏一族も殺傷されて、朝鮮国王が住む王宮が占領される結果となった。手を焼いた朝鮮政府は清国に援軍を求めるが、これを口実に日本も大軍を朝鮮半島に送り込んだ。仁川および漢城で両国の軍艦や軍隊が対立し、日清の関係は一触即発の危機に直面する。その後、八月三十日に済物浦条約が結ばれ、事件は解決へと向かう。

桃水が東京朝日新聞の特派員として朝鮮に滞在していた期間は、一八八一年から七年間にわたる。桃水の朝鮮滞在時期と重なる代表的事件といえば、この「壬午軍変」と一八八四年の「甲申政変」である。「甲申政変」は新清派である事大党政権と親日改革派である独立党の対立が背景にあり、日本公使竹添進一郎と結んだ金玉均ら独立党がクーデターを起こす。しかし、清国側の反撃で失敗し、金らは日本へ亡命することになる。

本来であれば、本章では後半の悪役である鄭思用について論じならなければならないが、あえて「壬午軍変」に注目しながら桃水が描き出した歴史的事実とその結末について論じる。なぜなら、この事件をきっかけに小説の中心が主人公の個人的物語から朝鮮をめぐって起こる歴史的物語へと移行するからである。

そもそも、後半の悪役である鄭思用は陰謀をめぐらせる人物ではあるが、前半の鄭思錫と比べると、それほど目立った役割を果たしているとはいえない。むしろ、朝鮮をめぐって起こる歴史的物語を展開させるための脇役にとどまっているといえる。

香蘭の拉致事件が解決してまもなく「壬午軍変」が起こる。桃水は実際にこの事件を取材しており、『朝日新聞社史 明治編』（朝日新聞社、一九九五年七月）によれば、日本に実情を報告するよう本社から指示された桃水が、漢城から釜山へ脱出してきた朴義秉という独立党の男を取材した記録が残っている。一八八二年八月八日の紙面には「この人の話を聞くに（中略）京城の常備兵は五千七百余人ありしが本年旧正月莱給与を与ふることなく六月に至り漸く一月分の給与を与へたり。斯れば兵士一同みな不平なる所へ又其米は残らず腐敗なしたり。是に於て大に怒」るという、「壬午軍変」の直接的な原因や漢城の様子を記した記事が載せられている。しかし、「胡砂吹く風」における「壬午軍変」に関する描写は、桃水が記者として書いた記事とは異なっている。これは、実際の歴史的事件を小説的虚構として取り込んだためと考えられる。

> 久しく摂政の地に立ちし青硯宮の国父君ハ数年前より外戚の為め権勢を奪はれ快々として楽しまず折もあらバ彼等を仆し再び政を躬らせんと望みしに近年政府ハ専ら開国の主義を執り（中略）当時此国の党派を分てバ政府即ち外戚党、国民即ち国父党の二つにして先の者ハ日本に依り後の者ハ支那に依り各々自己を利せんと欲し己あるを知つて暫く国あるを打忘れたる徒のみ、其何れに属するをも厭ひ真誠独立の国を建てんと望みたる李嘉雄が如きに至りてハ暁天の

星と稀れなり、李嘉雄一派の参謀たる正元八（後略）(17)

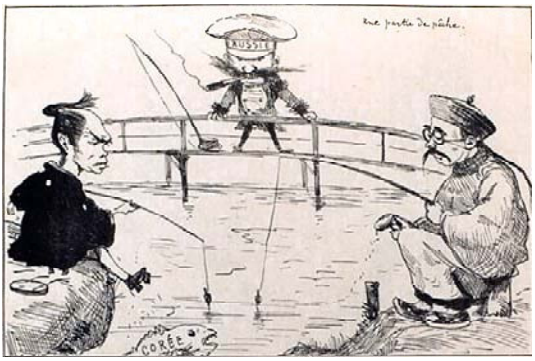
小説内では、「壬午軍変」について説明するため、事件以前の朝鮮国内の状況をはじめ、清国や日本との関係が描写されている。「胡砂吹く風」の前半は林正元の個人的な事件を中心に展開されているため、現代の読者が読んでも集中して一気に読める。一方、後半は当時の歴史的事件についての知識がなければ小説を読むのは難しい。しかし、現代の読者と比較して当時の読者にはそれほど難しい小説ではなかったと思われる。「胡砂吹く風」の連載開始は一八九一年であるため、一八四〇年前後の朝鮮をめぐる歴史的事件も、当時の読者にはそう遠い昔話ではなかっただろう。むしろ身近な事件として、読者は小説を読みながら新聞記事化されたその時代の出来事を想起することもできたのではなかろうか。

歴史における朝鮮の運命と「胡砂吹く風」において描かれた明治期の朝鮮とは異なっている。最終回において、林正元は朝鮮国王の信頼を得て同国の最高顧問となり、東アジアの同盟を実現させてその委員長となる。この結末に関して、上垣外憲一は『ある明治人の朝鮮観――半井桃水と日朝関係』において次のように論じている。

このような朝鮮の民衆の心理を理解すれば、一方的な武力による威嚇などが逆効果であることは明白であろう。桃水の提出した解決法は、日本の国籍は持っていても、日朝の混血児であり、朝鮮人とまったく違わない言葉を話し、完全に朝鮮人として行動の出来る、しかももちろん日本や西洋にも充分理解力のある、林正元であった。その彼が徒手空拳、次第に朝鮮の民衆と上流社会の信望を得、さらに日本の老練な外交官の起用を待って、日本と朝鮮の理想の協力関係がなりたつ、という一種の物語である。しかし、一方にはしゃにむな軍備拡張による、軍事力による朝鮮半島の制圧という計画が実現のものとなってきたとき、このような人心を獲得するという、政治外交的手段によって朝鮮との親交を全うし、さらに朝鮮の自立的発展を日本が援助するという理想図を、『朝日』という有力新聞紙上に小説という形で、百五十回も連載してという、この意味は決して小さくはないであろう。(18)

上垣外は「胡砂吹く風」の結末について、朝鮮と日本の友好的関係を将来に期待する結末と高く評価している。しかし、国際法で国際秩序を守る努力をする現代とは異なり、桃水が生きた明治時代は諸国が自国の勢力を拡大するために努力した無秩序の時代であった。桃水と同時代の人物にフランス人漫画家ジョルジュ・フェルディナン・ビゴーがいる。一八八二年に来日し、十七年あまりの滞在中に数多くの風刺画雑誌や風刺スケッチ本を残している。その代表的なものは、一八八七年から一八八九年にかけて刊行した時局風刺雑誌『トバエ』である。一八八七年二月十五日の『トバエ』に「魚釣り遊び」というタイト

ルの風刺画がある。朝鮮と書かれた魚を釣り上げようとする日清に対して、その横取りを企むロシアの姿が描かれている。当時の朝鮮をめぐる日本・清・ロシアの勢力関係をよく表現したものといえよう。こうした状況のなかで、桃水は新聞記者として当時の朝鮮をめぐる国際的状況を把握していたにも関わらず、「胡砂吹く風」の結末として朝鮮・日本・清の同盟を選んだことはあまりにも楽観的と言わざるを得ない。「胡砂吹く風」の結末は非現実的であり、朝鮮に対する日本のパターナリズムの姿勢が読み取れる。



【図】ビゴー「魚釣り遊び」(『ドバエ』1887年2月15日号)

また、林正元の妻香蘭が朝鮮の国籍を捨てて日本の国籍を取得する点や、国父君(国王の父)の誘いにも関わらず、林正元が日本人にとどまることを選択する点、そのうえで朝鮮の最高顧問になるという林正元個人が迎えた結末と、日本の援助(好意)で朝鮮が独立を果たすという結末に対する上垣外の好評価は多少過大な面があるといえよう。

ここで改めて「胡砂吹く風」が『東京朝日新聞』に連載された新聞小説であることに注意したい。当時の新聞小説が新聞社にとって勢力を拡大するための目玉商品としての性格を持っていたこと、『東京朝日新聞』が日本国内の読者を主な対象としていたことを踏まえると、林正元が日本人の国籍を捨てるという結末は当時の読者が受け入れるには無理があったろう。それは、桃水個人の問題というよりは、読者に受け入れられなければならない、新聞小説の限界だったといえよう。

おわりに

本稿では、桃水が「胡砂吹く風」においてどのように「同時代」を反映した登場人物を設定したのかを論じるとともに、小説内で描かれた明治期の朝鮮と同時代を生きた桃水の現実把握について考察してきた。その結果、新聞記事や桃水の朝鮮滞在経験が小説の描写と深く関係していることが明らかになった。

主人公林正元をはじめとする登場人物の設定には、桃水が見た「同時代」が反映されている。「胡砂吹く風」という小説には全編にわたって、桃水の二度の朝鮮経験が反映されている。本稿では、前稿に引き続いてその一部を明らかにした。今後も、「胡砂吹く風」と桃水の朝鮮経験の関係性について検討を重ねていきたい。

※引用に際して、旧字体はなるべく新字体に改め、ルビは適宜省略した。
※「胡砂吹く風」の引用は、『朝日新聞［東京］復刻版 明治編』第十四～十七巻（日本国書センター、一九九三年一月）による。

【注記】

1　上垣外憲一は『ある明治人の朝鮮観――半井桃水と日朝関係』（筑摩書房、一九九六年十一月）において、「胡砂吹く風」は伝奇小説と政治小説の特徴を持つが、より政治小説に近いと述べている。また、全円子も「半井桃水の人と文学――『胡砂吹く風』を政治小説として読む――」（『岡山商大論叢』第三十九巻第三号、二〇〇四年二月）および「アジアから見た日本文学――半井桃水が近代の初期に政治小説を書いたことの意義――」（『清心語文』第十巻、二〇〇八年七月）において、「胡砂吹く風」は従来の敵討ちの物語のような伝奇小説な趣向をとりながら、実は政治小説的な思想性を伴っていると論じている。

2　鄭美京は「新聞小説『胡砂吹く風』に描かれた朝鮮」（『韓国言語文化研究』第十一号、二〇〇五年十二月）において、作品の執筆動機や朝日新聞の朝鮮認識、当時の朝日新聞の読者層などについて論じている。また、權美敬は「風俗資料としての小説――『胡砂吹く風』、『小説東学党』での『付記す』の問題――」（『日本語文学』第三十二号、二〇〇六年二月）において、『胡砂吹く風』の風俗資料としての役割について論じている。

3　桃水が東京朝日新聞の特派員として釜山に滞在している際に『大阪朝日新聞』に連載した「鶏林情話春香伝」（一八八二年六月二十五日～同年七月二十二日）も、桃水研究で多く取り上げられている。なお、「鶏林情話春香伝」は韓国古典の『春香伝』を世界で初めて翻案した小説である。

4　一八八九年から一八九一年までの「胡砂吹く風」以前における桃水の小説群は、主に日本を舞台としている。例外は、一八九〇年四月十三日から同年五月六日まで『東京朝日新聞』に連載された「夢」である。「夢」において、桃水は初めて日本ではなく外国を舞台とした。ただし、波蘭（ぽーらんど）を背景にしているとはいえ、外国という空間が「胡砂吹く風」のように小説の内容にまで大きく関わってはいない。

5　水野達朗「半井桃水『胡砂吹く風』」（『比較文学研究』第七十号、一九九七年八月）一七六～一七七頁

6　「胡砂吹く風」十四回（『東京朝日新聞』一八九一年十月十七日）

7　「胡砂吹く風」九十一回（『東京朝日新聞』一八九二年一月二十六日）

8　「胡砂吹く風」十五回（『東京朝日新聞』一八九一年十月二十日）

9　田代和生『新・倭館――鎖国時代の日本人町』（ゆまに書房、二〇一一年九月）一七一～一七三頁

10　前掲注9同書、一八二～一九一頁

11　上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観――半井桃水と日朝関係』（筑摩書房、一九九六年十一月）、『上野一伝』（朝日新聞社、一九五九年十二月）および『近代文学研究叢書 第二十五巻』（昭和女子大学、一九六六年十月）を参考にした。

12　毎日新聞社編『明治・大正・昭和 世相と事件雑学事典』（毎日新聞社、一九七七年六月）八十七頁

13　松原真「仮名垣派から黒岩涙香へ――明治二十年前後の新聞小説について――」（『阪神近代文学研究』第十七号、二〇一六年五月）二十八頁

14　「小町奴」と「海王丸」の内容を簡単に紹介する。「小町奴」は、無念な形で亡くなった父の復讐のために生きてきた長吉が主人公の物語である。

長吉が危ない時には、いつも黒頭巾の男が手助けしてくれ、長吉は父の仇である力松を黒頭巾の男と力を合わせて復讐を果たそうとするというものである。一方、「海王丸」は汽船海王丸の沈没記事から物語が始まる。その唯一の生存者清作が、この汽船海王丸の沈没に絡んだ陰謀の真実を突き止めるというものである。

15 前掲注1同書、二四七頁。また、權美敬も「明治文学に描かれた朝鮮――明治二十年代の「朝鮮関連小説」を中心に」（「金沢大学大学院社会環境科学研究科 博士論文要旨」二〇〇二年六月）において、「胡砂吹く風」と「春香伝」の関係について言及している。

16 「胡砂吹く風」三回（『東京朝日新聞』一八九一年十月四日）

17 「胡砂吹く風」八十八回（『東京朝日新聞』一八九二年一月二十二日）。なお、新聞紙面では「八十七回」となっているが、正しくは「八十八回」である。

18 前掲注1同書、二六二頁。

【付記】
本稿は、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム 名古屋大会」（於名古屋大学、二〇一六年十月二十八～三十日）における口頭発表「歴史的事実と小説的虚構のあいだ――半井桃水「胡砂吹く風」をめぐって――」に基づくものである。会場内外でご質問、ご教示くださった方々に記して感謝申し上げます。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）